

① おぼせ 接頭語
格助 ⑤作者↓源氏 昼は何くれとたはぶれごと(うち)

② たまひ紛らはし 格助
⑤作者↓源氏 四・用 形容動詞・体 いろいろな

③ 紙を継ぎつつ 手習ひをし 給ひ、めづらしきさま 格助
格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助

④ なる唐の綾などに さまざまの 絵どもを 書きすさび 格助
格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助

⑤ 給へる、屏風のおもてもなど、いとめでたく、 格助
格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助

⑥ 見どころあり。人々の語り聞こえし海山のありさま 格助
格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助

⑦ を、はるかにおぼしやりしを、御目に近くては、 格助
格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助

⑧ げに及ばぬ磯のたたまひ、二なく書き集め給へり。 格助
格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助

⑨ 「このごろの上手にすめる千枝、常則などに 格助
格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助

⑩ 召して、作り絵つかまつらせはや。」と 格助
格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助

⑪ 心もとながり合へり。なつかしうめでたき御さまに、 格助
格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助

⑫ 世のもの思ひ忘れて、近う慣れつかまつるを 格助
格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助

⑬ うれしきことにて、 格助
格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助

⑭ 四、五人ばかりぞつと候ひける。 格助
格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助

⑮ 前栽の花いろいろ咲き乱れ、おもしろき夕暮れに、 格助
格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助

⑯ 海見やらるる廊に出で給ひて、たたずみ給ふ御さま 格助
格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助

⑰ ゆゆしう清らなること、所がらはましてこの 格助
格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助

⑱ 世のものと見え給はず。 格助
格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助

⑳ 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助 格助

とお思いになるので、昼はあれこれと冗談を

おっしゃって気持ちを紛らわし、手持ちぶさたに、
さまざまな

紙を継いでは(和歌などを)書き流しなさって、
珍しい様子の
唐の織物などに様々な絵を気分任せてお書きなさ

る、屏風の表の絵などは、たいへんすばらしく、

見どころがある。人々が語り申し上げた海や山の

様子をはるかに想像しなされたが、間近でご覧に
なると、

なるほど(描いた絵では)及ばない磯の様子を、
この上なく(上手に)書き集めなされた

「このごろ世間で名人と言われている千枝や常則な

どをお呼びになって、(源氏の書いた)絵に色をつ
けさせ申し上げたい。」と

じれったく思い合っている。親しみやすく立派な
ご様子に、

世の悩みを忘れて、(光源氏の)お側でお仕え申し

上げることを喜びにして、

四、五人ほどの人がずっとお仕え申し上げていた。

前栽の花が色とりどりに咲き乱れ、しみじみと
趣深い夕暮れに、(光源氏が)

海を見渡せる廊下に出なさって、たたずんでいら
っしゃるご様子が、

不吉なまでに美しいことは、(須磨という)場所
が場所だけに、なおさらこの世のものとは見え

なさらない。